慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	オウエンの社会思想
Sub Title	
Author	土田, 玉雄
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1931
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.25, No.6 (1931. 6) ,p.846(78)- 872(104)
JaLC DOI	10.14991/001.19310601-0078
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19310601-0078

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

オウエンの社會思想

土田玉雄

一

ロバート・オウエン（一七七一―一八五八）は産業革命の頂點に於てその成年時代を過ごし、永い間歐洲全土を震駭せしめてゐたナポレオン戰爭が之れに及ぼした結果をまざ〳〵と見てゐた。

この歷史上比類なき程の機械の發明、採用、その結果は勞働者の狀態に非常な變化をもたらした。オウエンが工業家として又社會改良家として最も活動して居た時代に是等の變化は最も嫌ふべきものとなつて來た。機械力は速かに人力に代り、新しい機械の知識の採用は勞働者の職を奪ひ、斯くて烈しい貧困と困窮とは勞働者階級に襲ひかゝり、この新しい事情に順應することの出來ない多數の人々は焦慮の裡に日を送つた。生産力の增大は主として勞働者階級の上に大なる困窮となつて落ちかゝつた。勞働者階級の地位の變化は全て惡い方への變化であり、彼等には其の理由も解らず、地位を改善するの手段をも知らなかつた。

生産力の增大、階級間に於ける富の分布及びそれよりして生ずる滿足、不滿足――危機はこれ等に關聯して生じた。如何にしてこの危地を脫すべきか、之れが當時の識者を惱ました問題であつた。オウエンも亦自からこの增大しゆく生産力を發展せしめ指導すべき地位にあつて、如何にこれ等を統制すべきか、生産物の公平なる分配方法は如何にせば多數の勞働者を雇傭し得るかの問題に直面した。それが解決するならば生産力の增加につれて、その狀態は改善され、富は增大し延いては國力の擴張ともなる。

英國の産業組織は當時迄はその發展を制限されて居り、かゝる商業上、人口上の大なる膨脹はなかつた。人口の一般狀態は、この時以來急激なる變化を生じた。

殆んど全ての工業の行はれてゐた自からの家から職人は逐はれ、新に水力を用ひる爲めに河畔に建てたられた工場は、職を求めて來る地方民によつて充たされた。農場や新しい發明の採用出來ない家內工業を除いては、雇ふ者傭はるる者の關係、慣習に完全なる變化が生じた。事業の膨脹と使用人の增加とは、從來の個人的關係の維持を困難ならしめ、一方、工場主の富の急激なる增加と、その結果として生じたる慣習の變化は、次第に二階級をひき離して、單なる賃銀の支拂人と受取人の關係にして終つた。古い家內工業の時代に於ては、必要なる生活條件であつた家族內の關係も、漸次その親密の度を弱めて行つた。機及び紡車は土地の耕作と共に家族全體の仕事であつた。父と息子が島に在るとき、母と娘は家にあつて紡いでゐた。子女は絕へず親の監督の下にあり、兩親の敎を受ける機會も多かつた。然し、若い者が家を離れて工場に働くとき、かゝる關係は次第に薄らいで行く。加之、かゝる工場工業の創始時代に於ては、一般に人手の不足を感ずるものである。雇主は無差別に傭ひ容れた。この事は救貧制度と結んでその惡影響は益〻著しくなつて來た。

オウエンはかゝる時代に工業家の一人として成功してゐた。かゝる狀態及びその結果は、等しく彼の上にも襲つて來た。彼は他の雇主とは離れて靜かにかゝる狀態を觀察し、この新しき制度の犧牲者の爲めに計畫した。こゝに彼の思想、計畫は生じた。

勿論當時にあつても勞働問題に關心を有つた人はあつた。然しこの增大しつゝある危險の重要性を大局より見た點はオウエン一人の功績に歸すべきである。（Lloyd Jones, The Life, Times and Labours of Robert Owen, pp. 1-7）

以下に於て「性格形成の原理」に發し、「レナーク州への報告」に於て略ゝ完成したと云はれてゐるオウエンの社會思想を尋ねて見よう。

二

「人の性格は彼によつて造られずして彼の爲めに造られる」

「凡ての誤謬中の最大なるもの、即ち各人が彼等自からの性格を構成すると云ふ考」（大林宗嗣譯、社會に關する新見解一四五頁）

オウエンの社會思想の根本を貫いてゐる精神は、この性格形成に關する理論であり、前者は「善の原則」であり、後者は「惡の原則」である。善人となるも惡人となるも全て環境の如何である、人の性格中にある罪を造り出す傾向の環境を取り去れば罪は生じない。されば「最もよく統治されてゐる國は、最良の國民教育制度を有すべきである」（前揭書一六四頁）

この教育の爲めに善き性格は形成され、幸福は齎らされる。環境の人の性格に及ぼす影響の大なるを信ずるが故に、何よりも教育の力を重大視し、全ての者に教育を要求し、而して教育をば良き生活、厚き友情及び善き仕事の根本であるとし、又教育こそ全ての困難を和はらげ、各階級の反感を消滅させ、この世をば理性と愛情の絆によつて、單一の協同共和體となすものであると考へた。

この環境の重要性を實現する爲めには、教育は正しい方法で幼時から授けられねばならない。

「凡ての國を支配する權力者が、彼等の人民の教育及び一般構成の爲めに、合理的な計畫を樹てねばならぬことを命ずる。

是等の企圖は、子供等を其の最も早い幼年時代から、凡ての種類の善い習慣で訓練する樣に企てられねばならぬ。この目的の爲めには、虛僞や欺瞞の習慣をなくさねばならぬ」（前揭書三八頁）

性格は主として幼時に於て形成され、最初の教育が一番印象の深いものであるから、最も注意が必要である。

然し型に嵌まつた教育を早くから行ふことには反對である。斯くの如き教育は伸びんとする性質を抑へ、單なる暗記が推理や注意に代はるからである。全ては幼兒の能力に應じたものであり、興味に訴へねばならぬ。

又全ての個人が教育によつて一定の型にされるのではなく、一の社會又は團體が、個人に對して共通の型を要求するのである。オウエンの目的は、善き社會行動の規範によつて人々は團體的となり、而して團體を構成する各員の相異を禁ぜんとするのではなくして、共存共榮を計らんとするのである。斯かる課程は幼時より始めることによつてのみ有效であり、それが合理的原則に基づく新

社會秩序への第一歩であるとする。

一の型に從つて人間を改造せんとするのではなく、成長して行く個人的の特質と共に社會的の特質をも認めた。子供は生來、學び考へんとするの能力を有するものであり、その能力は明確には知られないが、全てのものが等しく何等の取捨を行はずに、周圍の色に染まる白紙であるとは考へてはゐなかつた。各人が同樣であるとか、同等であるとか云ふことは考へなかつたが、全ての兒童はその敎育の如何によつて、やがて善き市民とも惡しき市民ともなり、社會に貢獻することも害を及ぼすことも出來るものと信じてゐた。

斯くの如くオウエンは、非常に幼年時代の敎育の必要を當時にあつて强調し、兒童に對しては、その隣人に常に善をなす樣に努めることを要求する。良き環境に惠まれた幼年の敎育、之れが行はれないのは、性格形成の原理を人が知らない爲めであり、又敎育が宗敎的偏見の下に行はれてゐるからである。

これがオウエンの性格形成論であり、彼の思想の全てはこれに關聯してゐる。

かゝる間に英國を一大工業國にまで發達せしめたナポレオン戰爭は終つた。其の結果として販路を見出し得ざる生產品は溢れ、失業者は增加した。これ等の現象は又オウエンの注意を促がすものとなつて來た。

三

ナポレオン戰爭が終る迄は實際、英國に於ては社會主義的な主張と云ふものはなかつたと云つてもよい位である。一八一五年と云ふ年は、英國の歷史上重大なる時期を劃する。英國は二〇年以上も戰爭に從事して居り、佛蘭西と戰つてゐる聯合軍への軍需品の供給は、殆んどこれを一手に引き受けてゐた。そのために財政は窮乏し、國債は巨額に上つた。然し國內に於ては新しい機械の發明使用によつて、生產力は增加し、海外に於てはその市場を獨占するに至つた。實に英國はこの生產力を以て佛蘭西と戰かつたのである。

この產業上の變革は、必然的に社會關係の變化を伴なつた。大企業の採用は新なる富裕階級を生み、その背後には俸給生活者、技術家、商人等の中產階級の非常なる勃興をみんとしつゝあつた。而して生產物は增加し、農民の都市移住により都市の人口は益〻增加した。之れにも增して大なる變化は、下層階級中に生じた。土地を耕し、その余暇に手工業を營んでゐた農民は、次第に田園を追はれて工場勞働者となり、院外救助制度及び工場に於ける少年勞働者の大なる需要は、又工場勞働者を著しく增加せしめつゝあつた。

以上の如き社會の變化は、戰爭中に於ては明かに現はれてはゐなかつた。全ての者は戰爭のために働き、國內のことに注意することは困難であつた。

戰爭の終結と共に新しい時代は始まつた。戰爭中には全ての害惡は戰爭に歸することが出來た。もはやその戰爭は終つた。多くの費用を拂つたその結果は、英國が大陸に於て得た市場の閉鎖となつた。一大消費者たる戰爭が終ると共に、大陸に於ける生產力が復活したのである。之れ迄は全てのものは戰時價格を有し、國家は戰爭の爲めに、價格を顧慮する處なく物資を購入してゐた。物價

は非常な騰貴となつてゐた。この反動は當然に生じて來た。

加之、英本國には二〇萬もの兵士が凱旋して來た。徒らに擴張された産業は、その最大なる需要者を失つた。賃銀の暴落、失業者の增加は明かである。

「所謂、戰爭から平和への激變が、英國の生産者間に全般の窮乏を齎した。穀物倉も農場の庭も一杯になり、倉庫はあらゆる製品で押し潰されさうだつた。物價は生産費より遙かに低落した。農業勞働者は解雇され、而かも何處にも職は見つからなかつた。工業家にしても農家同樣の狀態に陷り、已むなく何百人づゝかその職工を解雇し、多くの場合はその仕事を全然休止して終つた。全勞働者の窮乏がいよ〳〵激しくなつてき、上流富者階級も、このまゝでゆけば數十萬の失業者の扶養は、結局彼らの上に落ちかゝつてくるべきを見越しては、恐慌を來たさゞるを得なかつた。これは一八一六年即ち平和締結後第一年のことであつた」と當時のことをオウエンは述べてゐる。（The Life of Robert Owen written by Himself, Bohn's Popular Library, No.84, p. 168 本位田祥男、五島茂共譯「ロバアト、オウエン自叙傳」二〇一頁）。

一八一六年の半頃から、かゝる戰爭の影響は一般の注目する處となり、上流階級の人々は勞働者を壓迫するよりも、產業狀態の改善によつて勞働者を救濟せんと考へて來た。其處でこの原因及び救濟策を考慮するために一大集會が開かれた。

この集會によつて政治家、經濟學者、實業家よりなる一委員會が任命され、オウエンも亦委員の一人に擧げられた。この最初の會合に於て、彼は實業家として、この窮乏の原因を述べてゐる。

「この明かにいぶかしき窮乏の原因は、かくも長き大戰の間に起つた新たなる異常な諸變化に存すると私にはおもはれる。大戰中はあれほど長い期間あれ程ひろい規模で、わが陸海軍の徒消に供するため人も物資も、四半世紀の間あれ程焦急に需要されて來たのだ。いかなるものも戰時價格を得、而かも、それがずゐぶん長い間持續されて、そのためそれがまるで現代には實業の自然の狀態の如く見えた。手や物資の缺乏は、この惜しげもなき出費と相俟つて、戰爭の目的に必要な物資——その供給に於て、筋肉勞働に代るべき新たな機械の發明や化學的發見に對する需要を造り、それらに大なる奬勵を與へたのである。大戰は農業家、工業家、其他の富の生産者にとつては、すばらしい、最も金使ひのあらい一顧客であつた。そしてこの時期を通じて大抵のものがひどく金持になつたのだ。大戰の最後の年の經費は、この國のみで一億三千萬磅、即ち平時の經費を超ゆる八千萬磅にのぼつた。そこで平和が締結された其の日に、生産者のこのすばらしい顧客は死んだ、需要が減じたので物價も下落し、大戰には必要であつた貨物の如きは、その原價すら回收しえざるに至つた。穀物倉や農場の庭は一ぱいになり、倉庫はあふれ出した。そしてそれが吾々の社會の人爲的な狀態であつて、この富の大過剩こそ、現在の窮乏の唯一の原因なのだ。燒け、農場の庭や倉庫の在荷を。さうすれば繁榮は立ちどころに再開する、まるで大戰が續いてゐると同じ樣に。この引合ふ値段での需要の乏しさが主なる生産者を强ひて、かゝる有餘つた在荷が市場から影をかくすに至るまでは、その生産高及び生産費を減んじてゆく方策を考へさせたのだ、かゝる結果を致すために、生産に於てあらゆる節約が用ゐられた。しかも人間は、大戰中に

極くひろい範圍で行はれた機械的化學的の發見よりも、遙かに金のかゝる生產機械であつたので、人間は解雇され、機械が之に代らせられたのだ。――一方失業者の數は陸海軍の人員解雇によつて更に增加した。實にこの故に、大戰がつゞいた間その勞働を大いに需要された全階級の仕事は缺乏し、どえらい窮乏が起つたのだ。この機械力、化學力の增加は、たえず筋肉勞働の需要及び價值を減じつゝあり、而かもなほ減じつゞけるであらう。そして社會を通じてすばらしい變革を成し遂げるであらう」（前揭 The Life of Robert Owen, pp. 171-172 譯書二〇五―二〇六頁）

以上の如くオウエンはこの失業の原因を機械の發明及びその使用の增加に歸してゐる。この一般の考――機械の使用は就業を增加すると云ふ――と異つた說の爲め、これの救濟策を提出することを委員會から求められた。

この救濟案は實に彼の思想及び生涯の一轉期をなすものである。今迄は工場改革者、敎育制度の先驅者たりしものが、轉じて社會主義者、協同組合運動の先達となつたのである。

「現時の不況の直接の原因は、人間の勞働の價格の低下である。これは一般に機械が歐洲、亞米利加及び英國の工業に使用されることより生ずる。特に英國はアークライト及びワットの發明によつてその變化は著しくされた。

社會に於ける欲求品の生產に機械を使用することによつて價格は下落した。價格の下落は需要の增加を來たし、その需要の增加が非常に大であつたので、機械使用以前よりも、はるかに多くの勞働力を必要とするに到つた。

この機械使用の最初の結果として、個人の富が增大し、やがて發明を助成することになつた。改良につゞくに改良が機械に加へられ、數年ならずして歐米諸國一般に用ひられるに至つた。一般に個人の富は國家の繁榮をもたらすと考へられて居り、英國は二五年間もの戰爭により未曾有の人力を要し、失費を吝まず、政治的權力の頂點にあつて敵國を惱まし、友邦をおどろかしつゝあつた。

速みやかに然し著々として英國はこの羨やむべき狀態に達し、國富の增大及びそれにともなふ權力の增加には限りなきかの如くであつた。戰爭でさへも、それが歐洲全土を荒し亞細亞に延び、亞米利加に迄もおよんだ時には、新しい無限の資源を引き出だす刺戟であるかの如くに思はれた。世界を通じての人間生活の破壞、戰爭必要品の消費は、種々なる生產物の需要を生じ、英國製造工業を極度まで膨脹させ、機械の發明使用の勢は、なほこの大なる需要にはおよばなかつた。

然し終に平和は來た。英國は一億の壯年の勞働力をも超ゆる、常に活動してやまぬ新しい生產力を有した。是等の生產力は、英國の人口が一五倍にも二〇倍にも增加したと同じ樣な結果を生じた。英國の富力に於て、政治的權力に於て、戰爭中になした進步はもはや驚くには足りぬ。かゝる結果は當然であつた。大なる需要者たる戰爭はやみ、市場は閉ざされ、需要の減少はそれ等に續いて起つた。供給の減少に際して機械が人力よりも安いことが解り、機械は依然使用されたが、人力は縮小された。斯くて人間の勞働力は生存費以下の價格となつた」（Robert Owen, Report to the Committee for the Relief of the Manufacturing Poor, Everyman's Library. No.799, pp. 156-157）

こゝに失業の原因を認めて、之れが解決策として次の三途を擧げる。

一、機械使用の大なる減少

二、適當なる生存を得せしめるまで人口を餓死せしめること

三、貧民及び失業勞働者階級に仕事を與へること

第一の策は之を一國のみに採用するときはその國の滅亡を來たし、全ての國に適用することは殆んど不可能である。第二の策は人道上許さるべきではない。殘るは第三の策である。

如何にして貧民及び失業者に職を與ふべきか。これに關しては從來種々なる方法が企てられてゐた。然しそれには大なる缺陷があつた。

「現在の法規の下に於ては失業者は、富める勤勉なるもの、富力及び生産物によつて維持され、これを消費してゐながら彼等の勞働力は毫も生産的に用ひられてはゐない。加之、彼等は無智、怠惰より生ずる惡習慣を覺へ、常に貧民と結合して社會の害惡となつてゐる。

貧民の大部分はこの惡習慣を兩親より受け、現在の如き取扱の續く限りは、是等の惡習慣は代々續いてやむことはないだらう。

それ故彼等の狀態を改善する手段として、先づ子供等に惡習慣を敎へることを防ぎ、善き有用なる習慣を與へることが必要である」（前揭 Relief for the Poor, p. 159）

勞働能力の相違と云ふものは、主として勞働者の敎育訓練の程度の如何によつて生じ、救濟費用の支出方法の如何が、又彼等の利益安易を左右する。故にかゝる事業は最少の失費によつて最大の利益を收める樣にしなければならぬ。そのためには、もつとよく貧民の狀態を考へて見る必要がある。オウエンの見解によれば、貧民の多くの惡德及び不幸は、彼等の表面上の利益及び義務が對立する樣な狀態の下に、彼等がおかれてゐる點よりして生じ、又彼等が不必要な誘惑にとりまかれて居り、それに打ちかつ樣に訓練されてゐないことより生ずるのである。

それ故貧民をとりまく周圍の物質的改善は、明かに眞の利益と義務とが調和を保ち、不必要なる誘惑を除いた狀態の下に、彼等をおくことである。

貧民の狀態を改善する手段は、彼等の子供等を惡習に染むことより防ぎ、敎育により善き習慣を與へ、成年には適當なる仕事を課し、勞働及び出費をば彼等自からの最大の利益となるとともに、社會のそれとなるが如くにすることである。

この爲めに五〇〇人から一、五〇〇人位迄の人間を——平均一、〇〇〇人——一の施設內に住まはせ、この一部落內丈けで敎育も行ひ、仕事も與へ、自治獨立を行つて自給自足を計ることを說く。かゝる方法は、社會を統制してゆく上に最も經濟的であると共に、こゝに住む全員に對して永久的に富や幸福をもたらす最も完全なるものであることを、オウエンは自己のニューレナークに於ける實驗及び觀察から主張する。

この施設の大要は次の如きものである。

周圍に一、〇〇〇エーカーから一、五〇〇エーカー位の土地を有する正四邊形の敷地が一、二〇〇人位を收容するために必要である。この敷地の中には公共建造物を建てる。即ち、中央には便利で經濟的な調理場、食堂を作り、この右手の建物は幼兒の學校、講堂、禮拜所よりなり、左手の建物

は小學校、會議室、成年男女の室に當てられる。そこには必要品を賣る店もあり、工場もあり、周圍は農場、果樹園等にかこまれてゐる。

若し貧民及びその子女が今迄の樣な制度の下におかれてゐたならば、その惡い習慣、性質のために、何時までも社會の重荷であり、罪惡の源であり、かゝる狀態は到底改革することは出來ない。社會のために彼等が有利である樣にその狀態を改めるためには、全階級の援助の下にかゝる設備をなさねばならぬ。

各家族には四室宛を割當て、其人數は四人に制限されてゐる。即ち、夫婦に三才以下の子供二人迄が共に生活する。かゝる生活が今迄の貧民の生活よりどれだけよいものかは疑ふ余地がない。三才以上の子供は學校へ通ひ、特に造られた宿舍に容れられる。勿論兩親に會ふ機會は與へられてゐる。然し兩親其他のものから惡習慣を受けない樣にあらゆる手段が講ぜられ、社會に於ける有爲なる一員となる樣に敎育される。

婦人の仕事としては

一、幼兒の世話、家庭の處理
二、調理場で用ひる野菜の耕作
三、婦人に適する工場内の仕事を、一日四、五時間を超へない範圍ですること
四、この建物内に住居する人々の衣服の世話
五、順番に食堂、調理場、宿舍の世話をなし、正當なる敎育を受けたものは、兒童の敎育を受持つことである。

子供等は農場、工場にてその體力に應じて仕事の手傳をなし、壯年のものは農場、工場で必要品の生産に從事する。

貧民は無智であり、惡習慣を有し、正常なる敎育を缺いてゐるので、どうしても一定の仕事を與へて、よく働らかせねばならぬ。その仕事は健康によく生産的なものとする。その爲めには以上の計畫は充分に考慮されてゐる。

一、二〇〇人の人口に對して之れ丈けの設備は、九六、〇〇〇磅で出來、若し土地を借りれば六〇、〇〇〇磅で足りる。之れに反對する理由が何處にあらうか。救貧稅は益々高められ、貧民の不幸、墮落は益々激しからんとしてゐる。今迄の狀態では貧民は惡くならざるを得ないのである。今こそこれを實施すべき時である。「貧民救濟の今迄の制度――若くはむしろ制度のなかつたこと――が長い、いたましい經驗によつて强く非難されて來た」(前揭 Relief for the Poor, p. 165)

年々救濟の爲めに無駄な巨額の費用が、社會公正又は經濟の原理を無視して用ひられて來た。勤勉なるもの、報酬は怠惰なもの、扶養にあるのか。斯くの如き費用はたゞ貧民と不德義とを增加せしめるのみである。

されば乞云つて、失業者貧民を見棄てよと云ふのではない。働けば安易な生活が出來る樣にするのである。働くものにはその生活の保障があり、道德的とならしめ、知らずして罪を犯かす樣なこ

とのない制度を造らうとするのである。

これは個人の利益のみならず國家の利益ともなり、社會を調和、協同に導くものである。

オウエンの説くこの新しい村は、主として農業を營み、必要品は出來るだけ自給自足で完全なる地方的自治獨立體であつて、やがて國家的自治獨立體の土臺をなすものである。

この望ましき制度が、何故今まで一般に實行されなかつたか。この幸福を認めさせなかつたものは大なる誤の結果である。それは今まで說かれて來た宗教による。舊い宗教のある限り、人類には天國は永遠に閉ざされてゐる。

「世界の人々の精神、原理、實際は、自分が人類最後の運命であらねばならぬと豫見するこの變革に對して無準備だと私は知つた。人類全體に一つの新しいこゝろと新しい慣習とを與へるためには、諸障害が克服さるべきであると私はしづかに考へて來た。私は人間のうちのあらゆる本質的永續的の進步改良に對する大障害は、地上國民の宗教だと云ふことを知つた。この困難が克服され得ねば、人類はひどい小兒じみた無智――人間のあらゆる合理的性能を破壞しさる一つの無智――に永久に束縛されたまゝで居らねばならぬ」（前揭 The Life of Robert Owen written by Himself, p. 219 同譯書二五七頁―二五八頁）

今迄の全ての改良、變革の根柢には、强い宗教上の偏見がからまりついてゐた。それ故に眞の改良、變革を行ふ爲めには、全ての既成宗教を排斥せねばならぬと彼は云ふ。

始め彼の計畫は、單に救貧法に代るべきものとして提案されたのであるが、こゝに至つて終に社會改造の一般原理とまで發展してきた。（G. D. H. Cole, Robert Owen, p. 147）

性格形成論、救貧施設等に關聯して、オウエンの社會思想をこゝまで述べて來た。次第に明かにあらはれて來た彼の社會主義的の思想は、次に述べる「レナーク州への報告」に於て益々明瞭となり、充分に發展するのである。この中で、始めて彼はその思想の全幅を示し、その計畫を說明する。それは單なる失業救濟策ではなく、一の社會制度の根本である。

四

一八一九年サー・ロバート・ピール司會の衆議院の地金委員會の議事の結果に起因する一の恐慌が實業界に突發した。その爲めに何萬と云ふ勞働階級の人々は失業して、飢餓に瀕し、小商人は破產を免かれなかつた。全國の諸地方の中で、レナーク州は失業者の大余剩に苦んでゐた。然るにかのニュー・レナークの住民の間には窮乏も苦情もなかつた。（前揭 The Life of Robert Owen, p. 321. 同譯書三七六頁）

レナーク州はこの窮乏の原因の說明をオウエンに求めた。そこで彼はその救濟策を述べると共に、更に進んで全人類に有利な性格を形成し、人間性を統治するために、一つの合理的な社會制度を組織することを說明した。

これが一八二〇年五月にオウエンが提出した「レナーク州への報告」である。

その副題によつても知られる如く、この報告は公衆の窮乏、不滿をのぞき、貧民及び勞働者階級の永久的就業、性格、境遇の改善のための制度を設けて、生產及び消費の失費を減じ生產と平行し

得る市場を造り出すことを目的としたものである。

筋肉勞働者が一國にとつて必要なるは富の源泉であり、國家繁榮の基礎をなすからである。その勞働力は、彼等を維持するために要する失費よりも、はるかに社會にとつては有利でなければならない。この勞働者階級にとつて有利な職業がなく、斯くて生ずる一般の窮乏は、新しき生産力の急速なる發達に社會制度が適合して行かないためである。

新しき生産力と社會制度との適合は如何にして得られるか。之れを次の四點から觀察する。

（一）科學又は人工によつて人間の生産力は增加した。然し自然的の欲望には變化がない。生産力の增加につれて、人間にとつて肉體的の力は益々賴りがたきものとなり、反つて偶然に左右されることが多くなつてきた。

（二）科學的、機械的或は又化學的の力の增加は、直ちに富の增加をもたらす。其故に、現在の勞働者階級の失業は富の生産の過剩によるものである。現在の商業制度の下に於ては、世界の市場は在庫品の過剩に陷つてゐる。

（三）縱令市場が發見出來ても、無限の生産物の增加は又社會の富を作る。多數の人々は職を求めており、更に多くの人々は自己の無智よりして、適せざる仕事に從事してゐる。然もなほ科學的生産力は無限に增加せんとしてゐる。

（四）勞働者階級の就職難は富及び資本の缺乏より生ずるものではなくして、この異常に增加する資本の分配方法の不當なること及び生産手段と平行せざる市場又は交換より生ずるものである。

富の分配方法が改善されゝば、失業者に職を與へることは容易である。

人類はその原始時代に於ては、自己の爲めに生産をすると共に、その余剩を物々交換することによつて、富の分配を行つてゐた。生産力が次第に發展して交換が繁しくなつて來て、物々交換の不便が增加してきた。そこでその媒介物として貨幣を用ひる樣になり、所謂賣買が分配の手段となつた。斯くて交換は容易となつたが、人々は貨幣を得るために營業し、萬物は貨幣を以て評價されるに至り、その弊害は次第に顯著となつた。元來貨幣として用ひられてゐる金銀には、單に人爲的に認めた價値が存するに過ぎない。この人爲的な價値が標準となることによつて、全ての富の本質的な價値を、人爲的な價値にしてしまつた。その結果は社會の改良を根本的に後らせてしまつたのである。

然らば金銀の代りに何を以て價値を量るか。價値の自然的標準は、人間の勞働又はその作業に要した人間の肉體的、精神的の力の結合したものである。

斯くすれば人間勞働の需要の變動は少なくなり、勞働者はもはや人爲的な賃銀制度の奴隷となることはない。社會から窮乏や無智はなくなり、勞働者は、社會にとつても彼等自からにとつても價値あるものとなる。

蒸汽力及び紡績機械の使用は人力に非常なる力を加へ、その結果生産力は半世紀の間に約二倍となり、富は增加し、人口は十二倍にも及んだ。是等の發明、發見はそれから得られる利益よりも遙

るかに大なる害惡を社會に及ぼした。富は小數の者の手に集り、工業より生ずる富は小數の機械所有者の手におち、大多數の人口はこれ等獨占者の無智と移り氣とに支配され、大衆の生活はワットやアークライトの名の知られる以前よりも、遙るかに悲慘なものとなつた。

社會の爲めに利益なれとした發明發見の結果は、その反對を示してゐる。社會は改善されずに反つて惡くなるばかりだ。この窮乏せる人々のために「何事かゞなされねばならぬ」。

多くの余剩勞働者を給養する爲めには、集約的の小農制度が最も適當である。然らばこれ等の耕作者を如何にして土地に定住させ、社會及び彼等自身に最も有利なる樣に働かせるか。

この爲めには勞働量が價値の唯一の自然的標準とならねばならぬ。何者ば、新しき富を作りうるものゝ價値は、それを作つた富の價値と等しいからである。

富を生産した勞働者は、その勞働に應じて公平なる分配にあづかるべきである。斯くて「自然的價値標準」は「實際的價値標準」とならねばならぬ。勞働を以て價値標準とする爲めには、賣買される商品の中に含まれてゐる勞働量を確めねばならぬ。これは今迄既に「原價」として實際に算出してある。

社會の最大目的は富を獲得し、これを享樂するにある。

眞の物々交換の原則は、原價又はその中に含まれてゐる勞働量を標準とするものであり、交換はこの原則に支配されねばならぬ。發明が行はれ、人類の欲望が多岐になるにつれて、賣買が物々交換に代はつたことは前述した。

營利主義は最少の失費で最大の對價を得ることを教へる。然しこの貨幣制度もある時代には社會に適合したものであつた。之れが發明を刺戟し、人間の性質を勤勉ならしめた。だが、これが又人間を利己的として終まつた。人間同志を仇敵の樣にしてしまつた。

今迄の貨幣制度は、もはやこの社會には適しない。物々交換と營利主義の賣買の双方の長所を結合したものを採用すべきである。全ての物は其の原價又は含まれた勞働量によつて交換され、そしてこの價値を代表する媒介物を使用することも出來る。この媒介物は眞の變ることなき價値を代表し、本質的の富が增加したときにのみ發行される。この價値標準たる媒介物は、一日の勞働量であつて、この單位の正確なる價値を決定するのは困難ではあるが、この單位は勞働者の要する生活の必要品と便利品の價値以下であつてはならない。

金屬貨幣の代りに勞働量を價値標準となすことは、勞働者のみならず、地主、資本家にとつても等しく有利なものである。勞働は全ての價値の根本であり、唯だ勞働のみから高い利潤が農產物工業品に對して支拂はれるからである。この思想がやがて十年の後に實行に移されて、勞働交換銀行となつて現はれるのである。

オウエンはなほ進んで、この集約的小農を基礎とする理想的社會の詳細を「レナーク州への報告」に於て說明する。

一、その成員にとつて最大の利益となると共に、社會にとつても最大の利益となる團體は、何人位から構成さるべきか

二、これ等の團體によつて耕さるべき土地の面積は如何

三、これ等人口の給養及び兒童敎育の制度について

四、之れに要する諸設備の建設及び管理について

五、余剩生産物の處理及び各單位團體間の關係

六、これ等單位團體と政府及び一般社會との關係

第一の團體を構成する人員は、最小三〇〇人から最大二、〇〇〇人迄である。然し八〇〇人から一、二〇〇人迄が、農業社會としては最も適當であると云ふことが大であつて、一概に決定することは出來ない。であつて、平等の權利の上に立つものである。この社會は共同の勞働、共同の消費、財産は共有

第二の土地の面積は、地味及び位置によることが大である。その中でも大なる誤は、勞働者が自からの食物を自給今迄の社會は種々なる誤を犯して來てゐる。かゝる制度による方が、充分出來ず、彼等の生存が他人の勞働及び供給に頼つてゐることである。今迄は工業が農業と對立してゐたが、全な供給を受け得ると云ふ間違つた考を人々は懷いてゐる。人口が農業に從事し、その傍ら工業を營んだならば、農業と工業とが別々になつてゐる場合よりも多數の人々を給養し得、しかもその得る處は大である。

改善された制度に於ては、勞働者は自己の食料は自から生産する樣にされなければならない。これは生産、消費双方の點から見て有利である。

それ故に耕作者には充分の土地が割當てられ、生活必要品を充分に得られる樣されねばならぬ。斯くの如き生活、即ち自己のものは自から得ると云ふことは、愉快で、容易で、人生を合理的に享樂することにもなる。

余剩の生産物はたゞ筋肉勞働をなさない上流階級の人々を給養する爲めにのみ必要である。かゝる爲めに最も適當なる土地は一人當り半エーカーから一エーカー半までである。故に一五〇エーカーから三、〇〇〇エーカー迄が一單位の土地となる。

第三は人々の給養及び兒童敎育についてゞある。

勞働者にとつては住宅は仕事の場所に近い程種々の便宜がある。食物は共同の料理場で一時に作つた方が經濟であり、兒童の敎育は別々になされるよりも一緒に行はれた方が、良好な結果を得られる。

今迄は全て各人の自由に任せておくことが、個人の利益のみならず社會の利益であると考へられてゐた。かゝる個人的な自由放任の主義が、社會制度の基石であるとされて來た。然し團結及び協同が齎らす結果を知るならば、かゝる社會制度が如何に反社會的な不合理なものであるかゞ解るだらう。この爲めに人類は誤まられ、壓迫されて來たのだ。

この個人の利益と云ふ觀念からして分業が生じ、それより又無限の誤と不幸が生じ、斯くて人類の罪惡、不幸は生じた。新しい社會は協同、相互扶助の原理にたゝねばならぬ。協同の力によつて、個人主義では到底達することの出來なかつた結果を求めねばならない。人類は永い間個人主義者であり、お互に敵視してゐた。經濟學者が唱へた自由放任の原則は、人間を富裕ならしめる代はりに、

貧困に陷れた。

今迄の社會に於ては極端にまで分業が行はれ、社會の利益と個人の利益とは離離するものであつた。どの國に於てもその國民は幼年時代から、一國の繁榮は他國の進歩繁榮とは兩立しないものであると云ふことを敎へられて來てゐる。こゝに主張する原則はこの反對である。個人の協同によつて、社會の利益と個人の利益とを完全に合致せしめ樣とするのである。

この新しい社會では、住民の食事は一家族の如くに同一の建物內で行はれる。その爲めに各人は別に食事するよりも遙かに安價に出來るのである。全てはかゝる個人と社會との利益の調和と云ふ趣旨より出發する。

兒童は全て一家族の如くに一緒に敎育され、最初の學校は二才から六才迄の子供の爲めに、第二の學校は六才から十二才迄の子供の爲めに設けられる。

この世に於ける誤及び罪惡の最大原因は、人間は全て彼等自身によつて作られた意思によつて支配されるものであり、彼自身の好むまゝに作られたものであるとする考である。

「人は境遇の子である」これが正しいのである。この考の下に、敎育は行はれねばならない。よい環境の中で幼時より正しい敎育を受けること、斯くて始めて人間は合理的の生物となる。この敎育によつて活動力に充ち、有用なる知識にあふれた勞働者階級が出來る。而してこれが社會の最下の階級を形成する。しかもこの階級は、過去及び現在の社會に於ける最良の階級よりも、數等優れたものである。

第四に單位團體內の設備の建設は、地主、資本家、公益を目的とする團體、敎會、又は中流階級、勞働者階級及び農民の協力によつても爲される。これ等の設備には、各々管理者をおき、管理者は特に分業の行はれることを防ぎ、各員の利益が調和する樣に努めねばならぬ。

第五は余剩生產物の處理である。以上によつても解る樣に、この社會に於ては失費が少ないので、支出に對して得られる富の割合は大である。今迄の社會に於ては、如何にして他人を凌ぐべきか、如何にして自己の利益を確保すべきかを考へなかつたならば、人は生存の手段を失つたのである。然るにこの社會に於ては、人間の欲望は充分に充たされ、利己心を生ずべき動機がなくなる。全ての人にとつて、富がその欲望を越へる程に生產されることは容易であり、個人的に貯め込まうとする欲求の無くなつてしまふことは當然である。彼等にとつては富を蓄積することの不合理なことは、使ひきれない程ある水を壜の中に詰めて置くのと同樣である。公平、正義、公明正大の原理は、社會の全ての行爲を支配する樣になる。從つて勞働の生產物を彼等の間に交換するに際しても、何等の困難も起るまい。

交換は「原價」で行はれ、お互に瞞しあふ必要はなくなる。愉快な、統制された、合理的な就業の下に、各人は自から消費する以上に生產を行ふ。この余剩生產物は團體の共同の倉庫の中に容れられ、誰でも必要の時は自由に用ひることが出來る。

勞働量を價値標準として交換が行はれるので、人口が增加すれば、それにつれて市場も需要も增加する。それ故この制度の下では不況は生じない。

交換を容易ならしめるためには一定の勞働量を代表する新しい紙幣の發行も可能である。

第六新社會と政府及び古い社會との關係

新しいこの社會には法廷、牢獄、刑罰等の必要のない様に、人民は訓練されてゐるので、平時には政府の仕事を省き、戰時に於ては又團體的訓練が行き屆いてゐるので有利である。然し知識の進むにつれて、人間は戰爭の不必要に氣がついて來る。

戰爭をしないで全ての事を處理するに到るまでは人間は合理的な存在とは云へない。この制度はこれを實際に行はんとするものである。この新しい社會は今迄の社會とは異なり政府に對して失費を負擔させること少なく、反つて一切の重荷を輕減するものである。

今迄の人類の行動のあやまつてゐたことは、宛かも葡萄は蔓草であると云ふ丈けの知識で、無暗に蔓草を栽培し、何時までたつても葡萄がならないので、これを土地の罪なりとして、肥料を與へ、耕作に骨を折つてゐた様なものである。

「性格は個人によつて作られる」と云ふ原則を奉じてゐる限りは葡萄なりとして蔓草を栽培するものである。

「性格は彼の爲めに作られる」と云ふ原則を發見したとき、始めて葡萄の樹は發見されるのである。斯くて人類の生活は向上し多幸なものとなる。

三〇年間の研究及び經驗より得たこの計畫、即ち人類の性格及び狀態を改善し得る制度の下に於て、人民及び勞働者階級に永久的な生産的職業を與へ、不況不滿を除き去る計畫は、生産及び消費に於ける失費を省き、生産力に應じ得る市場を開くものである。(Robert Owen, Report to the County of Lanark, Everyman's Library, No. 799, pp. 245-298)

以上が「レナーク州への報告」に述べられたオウエンの思想であり、又オウエン主義の一般を示すものである。

之れは支配階級、資本家階級に宛てたものではあるが、これが勞働者に訴へる基となり、次第に勞働者との交涉の必要を認める様になつて來たのである。

オウエンは一八二〇年以來勞働者の間にその信奉者を見出し、新しい生産組織が一般化すると共に、若い勞働者の間にはオウエン主義が擴がつて行つた。(G. D. H. Cole, Robert Owen, p. 175)

五

オウエンの社會思想は、大體に於てこゝでその發展を完成してゐると考へてよいだらう。今後に於けるオウエンは、自己の理想を實現せんとする實行家となり、然かも事毎に失敗してゐる。

古き傳統、因習にとらはれた舊き土地を嫌つて、新大陸に建てた「協同村」ニュー・ハーモニーは住民を無差別に收容したので失敗し、この爲めに彼は殆んど破産に瀕した。彼はもはや國家や富める遊民に援助を求めることを斷念して、勤勉なる勞働者階級にその理想を說いた。然かもなほ彼は大衆を無視して小數のものゝために、樂しい社會を建設せんことを望んでゐた。

彼の生涯を通じて渝らざりしものは「性格形成論」であつた。彼は幾度失敗しても之れを失敗と思はず續けて行つた。結局に於て慈善家的の色彩の消へなかつた彼は自己の理想を說くに急であつて、

他の者は只だ彼に從ふものであると信んじてゐた、勞働者と共に完全に融合すると云ふことは、彼の自尊心が許さなかつたのであろうか。新しい「協同村」も勞働者のために作つて與へたのであつて、勞働者と共に作ることは出來なかつた。

結局彼は勞働者の味方となつたけれども、仲間として一緒にはなれなかつた。然し彼は勞働者に幾多の問題を提出し、其後の勞働運動に多くの暗示を與へてゐる。

オウエン自身の唱へた協同組合は成功しなかつた。然し之れから勞働者の得た教は大であつた。勞働者は勞働者的に解釋して其後の運動を續けた。

英國の勞働者が、自からの力を自覺して勞働組合を組織し、勞働運動を續けて來たことの大半は、オウエンに歸すべきであらう。この點に於て彼は勞働運動の父であり、勞働者の大なる保護者である。（終）

（昭和六年二月廿二日）

歷史學方法論の一面

高村象平

一

カアル・メンガアに從へば「現象世界は、二つの本質的に相異つた觀點の下に觀察せられることが出來る。其の認識が吾々の學的興味の對象を形成するのは、空間及び時間に於ける其の地位並びに其の相互に對する具體的關係に於ける具體的諸現象である。研究の前者の方向は具體的なるもの更に正確に云へば個別的なるものに向けられ、後者は諸現象の一般的なるものの認識に向けられる。故に認識に對する努力の此等兩主要方向に適應して、學的認識の二大部門が對立する。吾々は其の前者を簡單に個別的、後者を一般的と稱する」。(1)

更に彼は云ふ、「具體的現象が甚だ多樣なるにも拘らず、輕卒なる觀察によつても、各個の現象は特別な、それとは異れる一切殘餘の現象形態を示さないことを認め得る。寧ろ經驗は一定の現象が